OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	職場の環境と健康管理
Author(s)	榊, 孝悌
Citation	makoto. 1974, 7, p. 2-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86244
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

職場の環境と健康管理

人事院職員局福祉課長
榊　孝悌

最近のわが国における勤労者の職場環境の変化は著るしく、とりわけ高度経済成長をむかえる昭和三十年頃からの十数年は急激なものがある。総理府が行なっている労働力調査報告によると、第一次産業就業者は昭和三十年において一、五二八万人であったのが昭和四十七年には七四八万人と著るしく減少し、一方、第二次・第三次産業就業者は昭和三十年の二、五九一万人が昭和四十七年には四、三七九万人と大幅に増加している。また職種別にみると、主としてオフィス内で勤務する管理職、事務職、専門技術職などの増加は著るしくこれらの職種は、昭和三十年には、約六五〇万人であったのが昭和四十七年には約一、二八〇万人と約二倍となっている。またこれらの職業への女子の進出はめざましく、ことに専門技術職では六九万人から一三二万人、事務職では一三七万人から三八五万人に増加している。このような勤労者の室内への移動、女子の進出、加えて生産機構、消費流通機構などの集中化、巨大化にともなう設備の自動機械化、作業の細分化等は職場の環境と健康管理においてもいくつかの新たな問題を生じさせている。

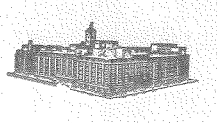
一例をあげれば空気環境の問題がある。産業機構の集中化、作業能率の効率化の促進にともない建築物の大型化や設備の近代化がすすめられ、暖冷房等の中央管理方式による空気調和設備の普及など職場環境の人工的な環境への変化は著るしいものがある。そのため温湿度調整の不適正による生理的障害の問題や換気や空気清浄の不十分による室内空気の汚染、衛生害虫の発生などの問題が生じている。もともと我が国の居住環境は、夏の高温多湿に即応して室内の換気が十分出来るように作られていたため、室内の換気について日本人は余り関心がなく、また室内と室外との温湿度差が少ないことから着衣による調節にしても季節を中心に習慣的に行われ、外部環境の温湿度に応じての調節はほとんど考えられていない。人間が生理的に外部環境の温度に適応出来る限界は、四季の気温に応じてせいぜい六～七度Cの範囲といわれている。そのため人工的環境下と自然界との温度差がこの範囲をこえる場合に生理的障害を生ずることは当然である。

元来衣服は、外の暑さ、寒さに応じて体温を一定に保つためのエネルギーの消耗を少なくする働きをもっているものである。冷暖房における温湿度の適正管理はもちろんであるが、着衣による体温調節の実施は環境管理の上で重要な点である。特に一般的に着衣量が少い女性については留意する必要があろう。

また冷暖房経費の節減の目的から新鮮空気量の減少と再循環空気量の増加も問題である。このため一酸化炭素や浮遊粉じんの増加など空気汚染を生じている場合も多く、空気清浄装置の普及等も今後の課題であろう。

さらに四季を通じて人間に快適である人工的な環境条件は、他の生物にも快適であり、四季の自然環境の変化によって適当にコントロールされてきた昆虫などの生物の生活にも大きな変化をもたらしている。一年中生そく、繁殖活動を続けるゴキブリ、蚊などの衛生害虫についての対策も健康管理の上でなおざりに出来ない課題である。

以上二、三の例をあげたが職場の環境条件の変化は、自然界における環境問題と同様に人の健康にとって幾多の問題をなげかけている。そしてさらに現代の職場には作業の単純化機械化など人間的能力による活動の制限、複雑な人間関係など人間が適応できるかどうか危ぶまれるくらいにストレスが充満している。

もともと人間は自然のサイクルの中で働いて、食べて、眠るという三つを基本にし生きている生物である。千数百年ほど前までは、太陽があがれば野や山に鹿や兎を追い、海や川に魚を求め、その獲物と田畑に出来た穀物や野菜を食べ、日が沈めば眠るというのが基本的な人間の生活であり、生きている動物としての人間にとっては最も健康な生きかたであった。むろん科学技術の進んだ現代の文明社会の生活ではこのようなことは出来ない。しかし人間の環境適応能力と科学技術の進歩のスピードの差は「亀」と「うさぎ」の差ではなく「かたつむり」と「ロケット」の差より大きい。健康管理を考えるとき自然のサイクルの中で生きている人間の基本的な生活要件を忘れてはならないと思う。

とくに人生の1/3の生活の場は職場であり加えて宇宙開発や海底開発のすすめられようとしている今日、今後ますます人工的環境下におけるオフィスは増加してゆくものと思われる。職場環境における健康管理の問題を改めて見直す必要があるのではないだろうか。